

## 若山牧水 中国路の旅 (上)

「若山牧水はなぜ岡山で泊まったか？」

明治四十年、早稲田大学の学生だった若山牧水は、夏休みの帰省時を利用して中国路を旅した。

試験の終わった六月中旬に東京を出発、途中で京都に遊び、二十九日に岡山駅前の旅籠「はつね」に着いている。そのことは同日夜に正富汪洋宛に宿から出した絵はがきから知られる。

一樹一草 追懐さはならむ われ今宵 君が故郷に宿る、  
微雨晴れて また 降る 斯の時 旅の愁ひの つきがたし ものぞかし 一杯を呼び 夢に君と遊ばむ

六月二十九日夜 岡山にて 牧水生

このはがきの後、牧水の足跡はぷつりと途絶える。

それから十日後の七月九日、山口県下関市に住む友人の大見達也に宛たはがきで、大分県の耶馬溪にたどり着いていたことがわかる。(以上、書簡集より)

十日間の旅の行程は不明だが、少なくとも若山牧水の中国路の旅の第一歩は岡山からはじまったことは動かしがたい。

では、なぜ牧水は岡山から中国路の旅を始めたのだろうか。  
その鍵をとく手がかりとなるのが『縮柳雑集』（わんりゅうざつしゅう）という一冊の和綴本だ。

明治三十六年に発行されたこの本は、若山牧水が師と仰ぐ尾上柴舟氏の義父の著作だ。編集兼発行は岡山県美作國苦田郡津山町大字椿高下十五番地の尾上劉、印刷者は東京市牛込区市ヶ谷加賀町一丁目十二番地の青木弘となっている。印刷所が東京ということは、あいだに尾上柴舟が関わっていたはずだ。

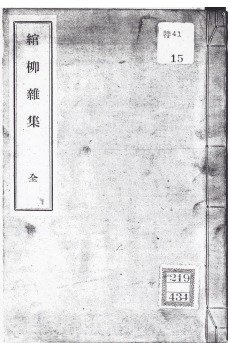
裁判所の判事だった尾上劉氏は、津山を振り出しに石川県小松、島根県浜田、岡山県新見を経て兵庫県龍野へと転任している。そのかんの送別や歓迎の辞、新見時代の短歌集団「國風會」との交流や、妻の実家である勝山の渡邊家との交わりなどを記録した備忘録だ。

明治三十六年という若山牧水が東京へ出る前年。東京に出た若山牧水はすぐさま尾上柴舟の自宅を訪ね弟子入りをしている。以来、足繁く通い、柴舟の妻・とら子さんにも気に入られている。

尾上柴舟の家に出入りをするうちに、『縮柳雑集』に目をとめた。読み進むうちに、いつか中国路を旅してみたいと牧水は思った。

いつもの帰省は神戸港から宮崎県の細島港まで船を利用していた。明治四十年の帰省は、神戸港に向かわずに鉄道を利用して陸路をたどることにした。あくがれの地への旅だ。

当時の時刻表を見ると九時三十八分に神戸駅を発った汽車は午後二時五分に岡山駅に着く。四時半ほどの旅だ。



国会図書館に收藏する  
『縮柳雑集』  
尾上柴舟の義父「劉」氏の  
備忘録的な著

## 若山牧水 中国路の旅 (中)

### 「ふたたび津山線に乗る」

一昨年、私は仕事で津山線に乗って、「峡縫ひて車は走る梅雨の日の雲さはなれや吉備の山々」おもわず若山牧水の歌を口ずさんでいた。若山牧水の中国路の旅は、ここから始まったにちがいないと思った。

そこで今年、再確認のために、ふたたび津山線に乗った。

岡山駅を出発した汽車は（当時は蒸気機関車だった）、四分ほどで法界院駅に停車、次の備前原へは五分後に着いた。右手に旭川が流れる。玉柏駅を過ぎた辺りから旭川左岸をS字に大きく曲がりながら進む。

両側に山がせまり、汽車は川沿いに行く。この辺りになるとまさに「峡縫ひてく」の風景になる。

ところで若山牧水は、「峡」を「かい」と読ませているが、音読みでも訓読みでも「かい」とは読まない。音読では「きょう」あるいは「こく」だし、訓読みでは「はざま」だ。

なぜルビをふってまで「かい」と読ませたのだろうか。推測するに、山と山のあいだを遡る峡谷（きょうこく）のイメージをかさねたかったのではないだろうか。

じつはこの歌は後に書き直されている。「峡縫ひてわが汽車走る梅雨晴れの雲さはなれや吉備の山々」

元東京大学教授で尾上柴舟の養子、尾上兼英氏は、昭和十五年ごろ尾上家の養子にはいるために津山線に乗って上京するが、そのころの津山線の想い出を次のように語った。

「あのころの津山線はマッチ箱とよばれる客車でねえ、一両にドアが三つあり、いまのコンパートメントのようになっていました」

現在、可悦SL広場に保存されているハ4995という客車なのだろう。いまの客車のように前後に行き来できない。

「車は走る」を「わが汽車走る」となおしたのは、コンパートメント式の汽車だったからかもしれない。しかも客は牧水ひとりだった。

汽車は一時間半ほどで津山駅に着く。当時の津山駅はいまの津山口駅にあった。斜め前方に城郭が取り壊された鶴山城趾の石垣が見える。

「わが胸の奥にか香のかをるらむこゝろ静けし古城を見る」

そんな心境だったのではないだろうか。町へはいるには一キロほど東の吉井川にかかる今津屋橋まで歩かなければならなかった。

尾上柴舟の生まれた家は、橋を渡って城の西側、椿高下（つばきこうげ）にあった。柴舟の叔母が家をまもっていた。

戸港から宮崎県の細島港まで船を利用していった。明治四十年の帰省は、神戸港に向かわずに鉄道を利用して陸路をたどることにした。あくがれの地への旅だ。

当時の時刻表を見ると九時三十八分に神戸駅を発った汽車は午後二時五分に岡山駅に着く。四時半ほどの旅だ。



津山城下は今津屋橋の向こうに広がっていた。



金川駅を発車した汽車はさらに山を分け入った。



この空の果てに歌詠みたちの競い合う新見という町があるという。城趾にたつて牧水は胸を躍らせた。

## 若山牧水 中国路の旅 (下)

### 「心の鉦とあくがれ」

津山城趾の西、千石坂を下ると尾上柴舟の生家のある椿高下に到る。城趾から見る椿高下のその向こうは、西にまっすぐに出雲街道が田園のなかをひとすじ伸びていた。

『縮柳（わんりゅう）雑集』に描かれた世界がこの先にある。若山牧水はまだ見ぬ世界へと思いをはせた。

尾上柴舟の生誕の地を後にした牧水は、神々の國出雲へ通じるという道をたどった。

久留米緋の裾をからげ、腰には替えの草鞋（わらじ）。股引にステッキ代わりの洋傘を杖にした旅姿。

着替えを入れた荷物を背に斜に背負い、懐には歌を書き留めるノートに、一冊の和綴じの本。いわずと知れた『縮柳雑集』。

明治三十二年、師と仰ぐ尾上柴舟が「いかづち會」詠草に詠んだ、「朝またき伯耆路ゆけは瘦馬のやせし額に秋かせそふく」

を口ずさみながら。

瘦馬（やせうま）とは奥さんの、とら子さんに対する柴舟自身だといわれている。大柄なとら子さんに対して尾上柴舟は小柄でスマートだった。

「美作や久米の皿山さらさらになわが名は立てじ万代までに」

古今集に詠まれた佐良山村を左手に見ながらしばらく行くと、オッペケペー節で有名な川上音二郎の歴史劇に登場する児島高德ゆかりの地、院庄が近づいてきた。

天莫空勾踐 時非無范蠡（てんこうせんをむなしゆうすることなかれ、ときにはんれいなきにしもあらず）

天は呉（ご）との戦いに敗れた勾踐（こうせん）を見捨てなかったように、先帝を見捨てることはありません。そんな意味だ。

牧水は音二郎がクライマックスで朗々と歌いあげる児島高德の白桜十字詩（はくおうじゅうじし）をそらんじていた。

「けふもまたころの鉦をうち鳴らしうち鳴らしつゝあくがれて行く」

この歌は、こうした背景のもとにうまれたのではないだろうか。

明治四十年、若山牧水が同郷の女性・日高秀子に淡い恋心を抱きながら、一方では人妻の園田小枝子に惹かれていく自分を律することができないもどかしさを感じながら。

こうした心を振り払うように若山牧水は出雲路を歩いた。

師の尾上柴舟を育んだ津山に、そしてまだ見ぬ歌詠みたちが多くいるという新見に思いを馳せながら……。